



最近、特に女子中高生の間で、自分自身を「オレ」と呼ぶ女の子がいるのを皆さんご存知ですか？私は「ボク」・「オレ」と聞いて男性が自称していると考えます。「ボク」・「オレ」の許容の流れは、このところ多くの若者の人気を集めているという浜崎あゆみの歌の歌詞でも見られます。『SEASON』の中では、「幾度巡りゆく限りある季節の中に僕は生きていて」と、歌い『EVOLUTION』では「そうだね僕たち新しい時代を迎えたみたいで奇跡的かもね」と、自分のことを「ワタシ」とは決して歌っていません。こうした女ことばは時代とともに大きく変化してきていることがわかります。

かつて、「女房」という語は宮廷に仕え部屋を与えられて住んでいた高級女官を指していました。今では、一般庶民の「妻」をいうように意味は変化しました。御殿に奉公していた「女中」の意味が下女（はしため）の意味に変わり戦前の「女中」を今では「お手伝いさん」と置き換えるまでに社会の風潮は変わりました。本書の『女の言葉』はこうした女性が使ったことばの流れなどを捕らえ概説された1990年に刊行された堀井令以知の作品です。

先ほど自分自身を「オレ」・「ボク」と呼ぶ女の子のことで触れましたが、その例は実は既に明治時代にもありました。「女学雑誌」(221号・1890年)にも女学生にこの語の使用をたしなめる文章が載っています。また、「読売新聞」(1905)は「女学生と言語」という記事で女学生の「キミ」・「ボク」を紹介しています。これに対して、教育者や識者によばれる人々は女学生にキミ・ボクの使用を戒めました。つまり、明治でも昭和でも女学生はキミ・ボクを使用しそれを咎められました。これは、現在でいう「オレ」と称する

のも女性が男性のことばを自分のものにする、つまり男のことばを奪う「ことばのジャック」として肯定的に促えられています。



この『女の言葉』の著者、堀井令以知は京都ことばも研究されており、本書においては「男女の京ことば」を取り上げています。京都語では、男女の言語差があり、女性は柔らかい表現が良いとされてきました。例えば、「行きなさい」を「イキヨシ」と言いますが男性はあまり使いません。食物にも「オ」や「サン」を付けて「お芋さん」「飴さん」などといいますが、これも男性はあまり使わないでしょう。この例で共通しているのは、ことばを柔らかくする文の働きがあるのです。

最近女ことばは乱れてきていると、言われていますが本書では日本の女ことばを歴史的背景や社会言語学的な点からなどの、さまざまな視点から本来の女ことばの美しさ・素晴らしさが書かれています。「文は人なり」といわれる様に、ことばの背景には人柄が隠されています。穏やかなことばには穏やかな人柄が隠されています。ことばには、その人の育成した環境・教養・知識・経験・人間関係が知らず知らずのうちにことばに反映してきます。現在、わたしは卒業論文で女ことばを調べています。その機会があって、実際に調査して思うのですが、女ことばは女性としての人柄や感情が特にことばに反映されていると思います。女性もどんどん社会で活躍するようになり「女性がどう生きていくか？」その生き方とともにことばも変化してきました。今では、男性語・女性語も差はなくなっています。それだけ女性もたくさんの表現ができるようになったのです。本書でも書かれているように女性はことばを話すことでもオシャレができるのなら、いろんな視点から女ことばを見直し、外見だけでなくことばも磨いていくのもいいのではないのでしょうか？

ひだか さゆり(日本語科 4年次生)